

(2) 高機能自閉スペクトラム症女児の特徴と支援についての考察

川崎医療福祉大学医療福祉学研究科医療福祉学専攻修士課程 角野 直美

【目的】

自閉スペクトラム症（以下 ASD）女性の有病率の少なさと症状の見えにくさから、これまで低年齢の女児の支援について、あまり焦点が当たってこなかった。ASD 女性の特性は、脳機能の差異によっておこるといふ仮説があり、思春期より低年齢段階であっても、何らかの兆候が見られている可能性が考えられる。本発表では、思春期以前の ASD 女児を対象に、ASD 女児特有の特徴を明らかにした上で支援について検討を行なうことを目的とする。

【方法】

対象児は、ASD の診断を受け、知能指数70以上の高機能域であり、それに近い認知能力や言語能力がある小学校2年生の女児1名とした。研究者は、対象児が通う小学校内で計12回の参与観察を行なった。分析については、対象児の行為や発話を、具体的な文脈において、他者の存在や話し合われていた

話題などの社会的状況も含めて行ない、その過程の中で、対象児の ASD 女児特有のものを探り支援の検討を行なった。

【結果と考察】

対象児の振舞いは、定型発達の子どもの行動に追随するものの、思わず本音をつぶやいたり、面白かったという感想が型通りでしかなかったりする等、振舞いと本意とする部分に乖離が見られた。このことを ASD の特性から考えると状況理解の困難さやコミュニケーションの困難さ等の影響が挙げられる。しかし、担任は、「模範的な子ども」と評価しており、周囲からは対象児の振舞い方に着目するにとどまり、行動の本質に気づきにくい状況があるのではないかと推察された。支援者は、こうした乖離を見逃すことなく気付いておくことが重要であると思われた。